

DX 実現に向けたローコード開発プラットフォームの 選定・導入と開発技法の研究 ーローコード開発マニュアルによる導入促進ー

アブストラクト

1. 研究の背景／課題／問題認識

DX 推進は企業が存続するために、必ず取り組まなければならない課題となっている。

DX 推進の方法の1つとして内製化が挙げられており、システム開発時間短縮および品質向上を図ることができる「ローコード開発ツール」による開発が着目されている。しかし、各企業でローコード開発ツールの導入を進めようとする動きはみられるが、多くの企業では検証段階であり導入にまで至っていない。その原因として、ローコード開発の進め方がわからず一步を踏み出せない状態（導入ハードルが高い状態）になっていることが考えられる。

2. 研究アプローチ／研究の進め方

ローコード開発ツールの導入が進まない具体的な要因として、以下2つが挙げられる。

- (1) 開発プロセスの全体像が不明瞭
- (2) 開発の経験や実績が不十分

上記課題へのアプローチとして、本分科会ではローコード開発向けのドキュメント（ローコード開発マニュアル）を作成する。このローコード開発マニュアルはアジャイル型、ウォーターフォール型にとらわれず、ローコード開発における開発プロセスの全体像が分かる内容とする。あくまでもローコード開発ツールの使い方を教えるものではなく、ローコード開発に一步踏み出せなかった人が踏み出せるようになる内容を記載する。

3. 研究内容／研究成果

ローコード開発マニュアルを使用することによって、システム開発者の導入ハードルが下がっているかどうかを検証する。サンプルの要件定義書を準備し、その要件に沿ったシステムを、ローコード開発ツールを用いて実際に構築してもらい、またアンケートを依頼し、回答結果より導入ハードルが下がったかどうかを検証する。ローコード開発マニュアルを読む前、読んだ後、実際にローコード開発ツールを用いてシステム開発を行った後の3段階のアンケートの中で、要件定義書に基づくシステム開発工数を見積もってもらい、さらにローコード開発ツールを用いて、要件定義書通りにシステム開発できたかどうかを、当分科会のメンバーで確認する。

アンケートの回答結果から、ローコード開発マニュアルを読む前と読んだ後では、相対的にローコード開発に対する意識に変化が見られた。「ローコード開発マニュアルを読むことで開発プロセスが明確になった」という意見が増えたことや、見積工数の算出方法が明確化したことから、システム開発者にとって導入ハードルは下がったと考えられる。また「見積工数と実績工数と比べたことで、ローコード開発のハードルが下がったことを体感した」という意見もあった。

4. 評価/提言

ローコード開発を導入する一步をなかなか踏み出せない状況を解決する手段として作成した「ローコード開発マニュアル」を使用してマニュアルの読了や実際に構築をしてもらったところ、ローコード開発に対する抵抗感は軽減されたという結果が得られた。今後、本研究で作成した「ローコード開発マニュアル」が、ローコード開発を推進する一助となることを期待する。

今回の「ローコード開発マニュアル」では、開発上コーディングがどうしても必要な箇所であったり、ツール選定上でのセキュリティ面の特徴などの考慮ができていない面があるため今後の課題とした。